

定本
伊東靜雄全集

全一
卷

定本伊東靜雄全集 全一卷◎

昭和四十六年十一月二十五日初版發行
昭和五十一年三月三十一日重版發行

著者 伊東靜雄

編集者 桑原武夫

發行者 渡邊睦久

發行所 人文書院

京都市下京區佛光寺通高倉西
電話 京都05(三五一)三三四三
振替京都一〇三郵便番號六〇〇〇
印刷 株式會社 太洋社
製本 坂井製本所

定價四八〇〇圓

(分)0392(製)350004(出)3266

定本 伊東靜雄全集

伊東靜雄全集

目次

詩

詩集 わがひとに與ふる哀歌

晴れた日に	七
曠野の歌	元
私は強ひられる——	三
氷れる谷間	三
新世界のキイノ	三
田舎道にて	四
眞晝の休息	四
歸郷者	五
同反歌	七
冷めたい場所	元
海水浴	元
わがひとに與ふる哀歌	元
靜かなクセニエ	三
咏唱	三
四月の風	三
卽興	四
秋鷄は飛ばずに全路を歩いて来る	五

咏唱

有明海の思ひ出

(讀人不知)

かの微笑のひとを呼ばむ

病院の患者の歌

行つて お前のその憂愁の深さのほどに

河邊の歌

漂泊

寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

鷺

(讀人不知)

詩集 夏花

燕	五
砂の花	五
夢からさめて	五
蜻蛉	五
夕の海	五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

いかなれば.....

決心.....

朝顔.....

八月の石にすがりて.....

水中花.....

自然に、充分自然に.....

夜の葦.....

燈臺の光を見つつ.....

野分に寄す.....

若死.....

沫雪.....

笑む稚兒よ.....

早春.....

孔雀の悲しみ.....

夏の嘆き.....

疾驅.....

詩集 春のいそぎ

詩集春のいそぎ自序.....

わがうたさへや.....

吳

毛

天

瓦

杏

杏

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

かの旅.....

那智.....

久住の歌.....

秋の海.....

述懐.....

なれとわれ.....

海戦想望.....

つはものの祈.....

送別.....

春の雪.....

大詔.....

菊を想ふ.....

淀の河邊.....

九月七日・月明.....

第一日.....

七月二日・初蟬.....

なかぞらのいづこより.....

羨望.....

山村遊行.....

庭の蟬.....

春浅き.....

吳

毛

天

瓦

杏

杏

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

空

詩集 反響

小さい手帖から

野の夜	二二
夕映	二三
雲雀	二四
訪問者	二五
詩作の後	二七
中心に燃える	二九
夏の終り	二九
歸路	三〇
路上	三三
都會の慰め	三三

百千の	三〇
わが家はいよいよ小さし	三〇
夏の終	三〇
螢	三〇
小曲	三〇
誕生日の即興歌	三〇

わがひとに與ふる哀歌

四月の風	三三
曠野の歌	三三
私は強ひられる	三三
歸郷者	三三
同反歌	三三
眞晝の休息	三三
冷たい場所で	三三
海水浴	三三
わがひとに與ふる哀歌	三三
即興	三三
詠唱	三三
秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る	三三
有明海の思ひ出	三三
かの微笑のひとを呼ばむ	三三
病院の患者の歌	三三
寧ろその日が私のけふの日を歌ふ	三三
河邊の歌	三三
行つて お前のその憂愁の深さのほとに	三三
凝視と陶酔	三三
いかなれば	三三
夢からさめて	三三
夕の海	三三

水中花	三
蜻蛉	三
燕	三
朝顔	三
八月の石にすがりて	三
自然に、充分自然に	三
夜の草	三
燈臺の光を見つつ	三
野分に寄す	三
若死	三
沫雪	三
笑む稚兒よ	三
孔雀の悲しみ	三
夏の嘆き	三
早春	三
金星	三
そんなに凝視めるな	三
早春	三
わが家はいよいよ小さし	三
疾驅	三
かの旅	三
なれとわれ	三
春の雪	三
羨望	三
菊を想ふ	三

淀の河邊	二
七月二日・初蟬	二
九月七日・月明	二
なかぞらのいづこより	二
春浅き	二
百千の	二
わが家はいよいよ小さし	二
小曲	二
誕生日の即興歌	二
夏の終り	二
『反響』以後	二
明るいランプ	二
小さい手帖から	二
野の檜	二
露骨な生活の間を	二
雷とひよつ子	二
子供の繪	二
夜の停留所で	二
無題	二
寛恕の季節	二
長い療養生活	二

倦んだ病人 一五

拾遺詩篇

空の浴槽		一六
庭をみると		一六
ののはな		一六
私の孤獨を		一六
公園		一六
櫻		一六
野茨の花		一六
追憶		一六
夕顔		一六
葉は		一六
窓		一六
八月		一六
父祖の肖像		一六
懼		一六
並木		一六
湖		一六
花咲く		一六
ぼくのうた		一六
事物の詩抄		一六
母		一六
新月		一六

秋 一六

廢園 一六

事物の本抄 一六

静かなクセニエ 一六

幸福な詩人達が 一六

花園 一六

秋の夜 一六

静かなクセニエ抄 一六

脚韻 一六

輕薄 一六

動物園で 一六

飛行機 一六

山中で 一六

VERKEHRSINSEL 一六

銃 一六

停つた馬車の中で 一六

淡水の中で 一六

Verkehrinsel 一六

修身 一六

風景 一六

音楽 一六

川沿ひの公園 一六

散步 一六

神様に 一六

牧人 一六

後退 一六

昨日の敵	……	一四
或る友に	……	一五
エケード	……	一五
四月	……	一七
泥棒市	……	一七
市中の或る一家	……	一八
馬用水の傍で彼は歌ふ	……	一八
残された夫	……	一九
市中の或る一家	……	一九
少年N君に――	……	一九
入市者	……	二〇
まだ獵せざる山の夢	……	二〇
拒絶	……	二〇
さる人に	……	二一
追放と誘ひ	……	二一
疾風	……	二二
誓ひ	……	二二
幻	……	二三
睡眠の園	……	二三
墜ちし蝶	……	二四

散文

子規の俳論	……	二五
山科の馬場	……	二六

宿木	……	二六
高野日記より	……	二六
わが笛	……	二七
詩一篇	……	二七
虎に騎る	……	二八
朝顔	……	二八
無題	……	二九
稻妻	……	二九
柳	……	二九
ざれ歌	……	三〇
みちのべに	……	三〇
送別	……	三〇
うたげ	……	三一
二十五周年祝歌	……	三一
薪の明り	……	三二
未定稿(假題 闇をゆく牛)	……	三二
未定稿(阿部野高校)	……	三三
譯詩(ヘルデルリン ケストネル ハイネ)	……	三三
作品年譜	……	三四

作者より	……	三七
山科の馬場(定稿)	……	三八

談話のかはりに	三三	偲草	四三
今年の夏のこと	三三	萩原先生を哭す	四四
大阪	三三	讀み方	四五
感想	三三	蓮田善明著『神韻の文學』序	四六
感想	三三	★	四七
感想	三三	追悼	四八
日記	三七	『小さい灯』のはじめに	四八
松下君と私	三七	近況	四九
沙彌滿誓の歌	三六	煙草	四九
文藝文化のアンケート	三六	雜記	五〇
立原道造君と私	三六	漢字制限並びに現代かなづかひについて	五〇
レーナウの一詩	三三	「小さい手帖から」はしがき	五一
京都	三三	病院から	五一
『夏花』	三三	聲	五二
『風流論』に就いて	三三	花	五二
白河	三三	病院から	五三
談話のかはりに	三三	水晶の觀音	五四
梅の花	三七	病院から	五四
春駒の記	三六	上村肇詩集『海鳥の歌』序文	五五
文章	三六	療友追悼文	五五
『はぐれたる春の日の歌』	三三	雜	五五

日記

昭和十三年	三
昭和十四年	三
昭和十六年	三
昭和十七年	三
昭和十八年	三
昭和十九年	三
昭和二十年	三
昭和二十二年	三
昭和二十三年	三
昭和二十六年	三

書簡

書簡	三
書簡、宛名人名別索引	三

編註	三
年譜	三
後記	三

詩

ここには著者の生前に刊行された、第一詩集『わがひとに與ふる
哀歌』、第二詩集『夏花』、第三詩集『春のいそぎ』、第四詩集『反
響』と、死後に刊行された『伊東靜雄詩集』のうちの「反響以後」
の部、および以上の詩集に掲載されていない詩、すなわち「拾遺詩
篇」（小高根二郎蒐集）を収めた。今日までに知りえた伊東靜雄の
詩のすべてである。

『反響』のなかで〈小さい手帖から〉に含まれる以外は二段組に
したが、それは既刊の詩集のなから伊東靜雄が再収録した部分だ
からである。再収録に際しての推敲はなほだしいものは詩全部を、
さほどでないものはヴァリアントを掲げた。ただし「早春」「金星」
「そんなに凝視めるな」の三篇は再収録の部分に著者自身が初収録
したものである。